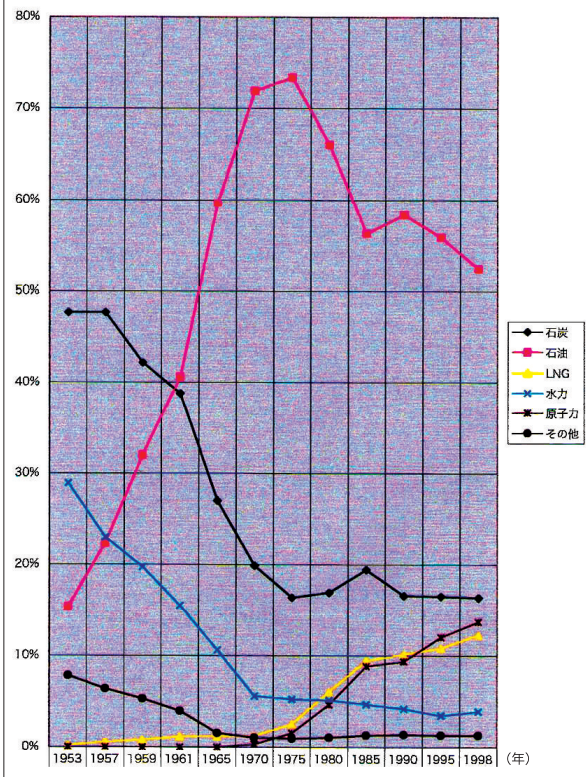


日本のエネルギーのうつり変わり

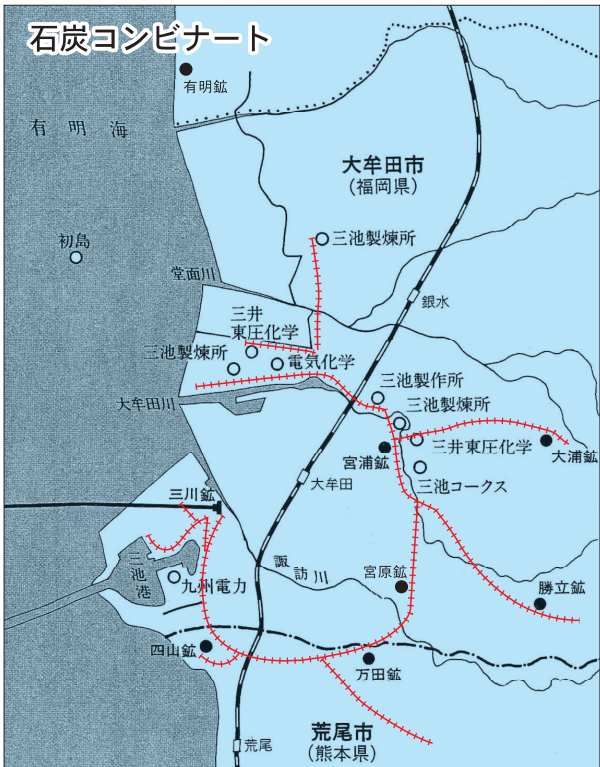


およそ50年前まで、石炭は日本のエネルギーの約半分をしめていました。

多いときには、そのうちの約4分の1の石炭を三池炭鉱でほっていました。

そして、明治時代、大正時代・昭和時代に、工場がたくさんできて、そこで使うねん料や原料として使われていました。

とくに戦争が終わったときに、やけ野原となった日本が、もとのようにさかえた国になるための力として、石炭は、大きなはたらきをしました。



また、日本で初めてのもっとも進んだ「石炭化学コンビナート」の仕組みもできました。炭鉱を中心に化学工場や金ぞく工場、発電所などをつくり、それを、炭こうせん用鉄道でつなぎました。

そして、石炭からコークスというねん料をつくりました。

また、コークスをつくるとちゅうに
できてくるものを利用して、化学せい
品(ひ料やせん料など)をつくりました。

このようにして、大牟田は「石炭と工場の町」とよばれるようになりました。

そして、日本の産業の発展に大きな
はたらきをしました。

